

新島襄の持病「リウマチズム」について

布施田哲也

公立丹南病院

新島襄（にいじま じょう, Joseph Hardy Neesima, 1843/02/12–1890/01/23）はキリスト教の布教家で同志社大学の創立者でもあり、福澤諭吉等らとならぶ明治六大教育家の1人である。新島襄は、生涯病苦に悩まされ本人曰く「諸病の間屋」「病魔の一人」と称しているほどであるが、彼の病歴について詳細に論考したものは少ない。

新島襄全集で日記・書簡等は通読でき、当時の医療状況も大変興味深く記されている。彼が苦しめられたリウマチズムについて当時の知識で検証していく。リウマチズムの認識はオスラー内科学書（1892年の初版本）を主として参照した。

新島襄の主な病歴は以下の通りである。

1. 19歳時（1862）麻疹に罹患する。
2. 27歳時（1870）春、リウマチズムに罹患、以後何度も繰り返される発熱に悩まされる。
3. 41歳時（1884）ヨーロッパ単独旅行中スイスの山中で、突然の呼吸困難の発作に襲われ遺書をしたためる。
4. 44歳時（1888）正月に動悸をおぼえ、以後不整脈は終生続く。
5. 46歳時（1890）1月11日よりの胃腸症状から盲腸部の痛み、激痛、鼓腸、衰弱となり23日永眠した。

新島襄は、少年期を通じ壮健であったが、19歳時（文久二年）の麻疹大流行の際に麻疹に罹患した。青年期の麻疹であり軍艦操練所を3ヶ月休むほどの重症であった。函館より密航を企て渡米後、27歳時アーモスト大学卒業前に何週間も続く発熱で起き上がれなくなっている。彼は、日記で「very severe rheumatism」と記している。以後、発熱・頭痛・不眠・心臓の不調に終生悩まされている。

当時のリウマチズムの認識は、次の通りである。「20–30歳代の男性に多く見られ春先に発症することが多い。突然の高熱で、40度を越すこともしばしばで、2,3の関節痛を伴う。安静時は痛くないが、ひどいときには寝ているときの毛布の重みや上掛けがすれるだけでも飛びあがるほどの痛みとなり、ただひたすら発熱の時期は安静が必要である。1回の発作はだいたい10日から14日続くとのことが多い。発作は年余にわたって繰り返すことがある。」

リウマチズムはRheumatic feverとも記されており、今日でいう溶連菌感染後のリウマチ熱である。乳酸原因説、脳起因説、未知の感染症の3つが当時原因として推察されて、心合併症との関連も気づかれている。

日記書簡等での心左辺の拡大、心雑音の記載があり40代からの労作時呼吸困難、不整脈、心拡大、不整脈等は、リウマチ性心疾患（心臓弁膜症）と考えられる。解熱鎮痛剤はキニーネを使用し、主だった療養法はベット上安静と温泉療養であった。上記2から4の症状は、当時のリウマチ熱の典型的な自然経過をみているものとおもわれる。

オスラー内科学書によれば、リウマチズムには有効な医薬がなく、サリチル酸は痛みの軽減には役立つが自然経過は変えないと考えられていた。もっともサリチル酸が使用され始めるのは1870年代後半である。

彼のリウマチズムは、教育布教活動を著しく制限したのではあるが、書簡の中で「自分の病氣と苦痛を通して、苦難を受けて死に給うた救い主に対し、一層共感することができます」と述べており、他人をより深く共感できる境地に至っている。自分の一生は「見えざる御手 Unseen hand」といったものに突き動かされていると新島は確信していた。次の発作がいつかわからないリウマチズムによる突然の高熱や已む無き休息といったものは、その時々自分の立場・使命・限られた命をより深く内省することとなり、新島襄自身が「Unseen hand」を深く意識することにもつながっていったと考えられる。